

自立をふまえて（どの子ども共に生き，共に育つ）

～一人ひとりの実態をふまえた支援のあり方～

I 主題設定の理由

近年，全国的にインクルーシブ教育が周知され基礎的環境整備・合理的配慮が進んできている中，東山梨地区の特別支援学級数は増えてきており，知的・情緒・肢体不自由・難聴・弱視と多様な障害にわたり，児童の実態も様々である。また，通常級においても数パーセント在籍するといわれる支援を必要とする児童への対応も急務とされ，一つひとつの学級が抱える悩みは深くかつ多様化しているのが現状である。そして，在籍・通級及び特別に支援を必要としている子どもたち一人ひとりの障害の状況や発達段階，その特性に合わせた支援は，どの学級についても共通した重要な研究課題である。

春季教育研究集会においても「どの子ども共に生き，共に育つ」の研究テーマのもと，今年度の方向性として自立生活の実現への取り組み，地域で主体的に生きていくための取り組み，特別支援教育のあり方を考えながらインクルーシブ教育の実現をめざした取り組みなどを実践していくことが確認された。

そこで本年度も，授業実践・学習会・情報交換などを通して，児童生徒の理解と支援方法などを模索し，児童生徒一人ひとりの実態に合わせた支援内容，支援の方法に迫るべく本主題を設定した。

II 研究の内容と方法

1 研究の具体的な内容と方法

- (1) 全体会や小部会ごとに講師を招いて学習会を行い，理解を深める。
- (2) 小部会ごとにテーマを絞って児童生徒の実態を考えた教材研究を行い，個に応じた授業づくりをする。統一授業研に向け，部会員一人ひとりが研究授業をするという意識をもち略案を持ち寄ることにより，部会全体で授業者を支え児童にとっての有効な支援・授業構成をより深く追求していく。
- (3) 小部会ごとに情報交換や授業研を見据えた実践発表を行い，一人ひとりの児童の実態をふまえた効果的な支援のあり方を探る。

2 学習会の実施

- ・ 8月1日 〈全体会〉

岡 輝彦先生（笛川小教頭）

「合理的配慮，インクルーシブ教育システムについて，またその具体的な事例について」

- ・ 8月1日 〈小部会〉

飯嶋 多三恵先生（かえで支援学校 地域支援教育担当）

「教材の効果的な使用法について」

- ・ 1月11日 〈小部会〉

飯嶋 多三恵先生（かえで支援学校 地域支援教育担当）

算数科 「量の単位のしくみを調べよう」についての指導・助言

3 授業研究

(1) 知的障害部会授業研究

算数科「量の単位のしくみを調べよう」

授業者 : 大和小学校 小野 紀男教諭

指導・助言者 : 大和小学校 岡 利光校長先生

指導・助言者 : かえで支援学校 飯嶋 多三恵先生

(児童早退のため、後日実施し、レポート提案を行った。)

(2) 自閉情緒・通常学級部会授業研究

自立活動「人生のアイテム」～頭にきたとき編～

授業者 : 井尻小学校 名取 美和教諭

指導・助言者 : 笛川小教頭 岡 輝彦先生

Ⅲ 成果と課題

1 成果

- (1) 学習会では、特別支援教育を取り巻く課題、合理的配慮の具体例や個別の支援計画の立て方など学級経営に実際に役立つ内容でよい学習の場となった。また、教材の使用法について 専門的な立場の講師から話を聞くことができ、有効に活用する手立てについて学ぶことができた。
- (2) 小部会研究では、各校の児童の特性・事態について実践報告や情報交換をすることができ、どのような支援が効果的であるかを話し合い、各自の日々の実践に生かすことができた。
- (3) 統一授業研の研究授業については、部員全員が授業をすると意識して実践報告や資料・略案提案したことで、「一人ひとりの実態をふまえた支援のあり方」というテーマにせまる研究につながった。指導案検討の段階から助言者に指導を受けることができた点も有効であった。自立活動の授業では、児童が自分の気持ちや行動をふり返り、これからどのように考え、行動していったらよいかを考えていく自他の理解につながる内容だった。児童の行動の背景にどんな理由があるのかを的確に把握することが大切であり、そのことが児童理解につながるということを学ぶことができた。

2 課題

- (1) 研究授業において、一人学級での授業の難しさや授業ができなかった場合の対応については、事前に考えておくことも必要になる。
- (2) 全国的にインクルーシブ教育が周知され基礎的環境整備・合理的配慮が進みつつある中、特別支援学級の担任だけでなく、小中各校様々な立場から研究に参加してもらい、様々な視点から指導・助言いただき、討議できるとよい。

(部長 那口真知子)